芥川賞作家 高瀬隼子さん

特集

本との出会い、本のある暮らし

日常の小さな違和感や人の感情を丁寧に描く作風で多くの読者を魅了する、本市出身の芥川賞作家・高瀬隼子さん。これまでどんな本と出会い、どのような道のりで小説家になったのか―。昨年11月、図書館で講演会「本との出会い、本のある暮らし」が開かれ、高瀬さんがこれまでの歩みや作品に込めた思いなどを語りました。講演の一部を紹介します。

―本との出会いを教えてください。

小さい頃からずっと本が好き。文字が読めない頃は親に絵本を読んでもらっていたし、平仮名の読み書きができるようになってからは平仮名の本を読んでいました。市立図書館もよく利用していました。

―書くことに興味を持ったのはいつでしょうか。

気付いたら好きになっていた感じです。最初の記録は幼稚園の頃のお絵描き帳。間違いだらけの平仮名で、物語を書いた形跡がありました。オリジナルではなく、「ピノキオ」のパクリみたいな…。完全にオリジナルで書いたのは小学5年生の時。小中学生の物語コンクールに応募しました。その頃に「高瀬」というペンネームを考えて、長らく使っています。読むのも書くのも好きだったので、いつの間にか、「物語を書く人」になりたいと思うようになっていましたね。

【プロフィル】 1988年生まれ。新居浜西高校、立命館大学文学部卒業。2019年、「犬のかたちをしているもの」（集英社）で第43回すばる文学賞を受賞しデビュー。2022年、「おいしいごはんが食べられますように」（講談社）で第167回芥川賞を受賞。その他、「水たまりで息をする」（集英社）、「新しい恋愛」（講談社）などがある。

―すぐに結果が出ない時期もあったと思いますが、その間、どのように書き続けたのでしょうか。

今37歳なんですが、小説家デビューし、新人賞を受賞したのが31歳の時。小学生からコンクールに応募をしていましたが、どうすれば作家になれるのか、分かっていませんでした。大学で文芸サークルに入ったことで、文芸誌（小説の連載などを行う出版社の雑誌）での掲載を経て、本にしてもらうという流れを知ったんです。大学2年生の時、20歳で初めて文芸誌の新人賞に小説を書いて応募しました。もちろん落選して、その後も毎年1～2作応募しましたが、10年間くらい落選し続けていました。

ただ、応募から結果が出るまで半年くらいかかる。落選したと知ってショックなんですけど、もう次の執筆にかかっているし、大打撃というよりは「ああ、へこむー」みたいな…。そんなことを10年やっていたので、続けられたのかなと思います。苦手なことをする時は頑張るぞと思ってやるけど、小説は何かのモチベーションをエンジンにするというより、毎日当たり前のものとして書いている感じです。

―「おいしいごはんが食べられますように」は、どんな思いで書きましたか。

デビュー前は1人で作品を書いていて、新人賞には10年間落ちていたので、どうせまた誰も読まないんだろうな、何書いてもいいや、くらいの気持ちで書いていました。「おいしい～」は4作目になるので、編集者1人は絶対に読んでくれるという安心感の中で書いた作品になりました。

物語は職場が舞台で、3人の登場人物が出てきます。小説の面白いところは、100％の善人も100％の悪人もいないところだと思っていて。現実にも、自分自身もそうだけど、良いことも悪いこともするし、優しくできる日もあれば八つ当たりする日もある。良い面、悪い面という一面でできているわけではなくて、何なら百面体くらいの存在が人間だと思っています。この登場人物たちも、そうです。

―芥川賞受賞を振り返っていかがですか。

受賞の前年、「水たまりで息をする」が候補になった時の方が驚きました。当時は会社勤めをしていて、帰宅中にその連絡がきたんです。こんなことが自分の人生で起こるのかって、驚いて歩けなくなっちゃって。息を整えてから、初めてタクシーで帰りました。翌年、「おいしい～」の時は、担当編集者も2回目だからと期待してくれていて…。受賞した時は、どちらかというと、ほっとした気持ちがありました。

―原稿に行き詰まることはありますか。そんな時はどんな気分転換をしますか。

原稿に行き詰まるのは毎日です。書けない書けないってずっとパソコンの前で立ったり座ったりして、気付いたら朝になるという繰り返しで…。私ホラー小説が好きなんですけど、余裕がある時は文庫本をお風呂に持ち込んで、半身浴しながら読んでます。すごくすっきりします。

高瀬さんの人生を彩ってきた本はこちら

「なんて素敵にジャパネスク」（集英社）氷室冴子
　作者の氷室さんが大好きで、小学生の頃によく読んだシリーズです。

「妖怪レストラン」（童心社）松谷みよ子
　小学生の時、大好きだった本。怪談レストランシリーズの本は、実家に何冊もありました。

「にぎやかな部屋」（新潮社）星新一
　初めて買った文庫本が星新一さんの作品。子どもの頃と大人になってからでは違う味わいで読めます。

「菜食主義者」（クオン）ハン・ガン
　昨年ノーベル文学賞を受賞したハン・ガンさんの作品。ハン・ガン作品はどれも好きですが特にこの一冊がおすすめです。

「マザーズ」（新潮社）金原ひとみ
　大ベテランの作家さんですが、年々すごさを増しているように思います。作風は変わっていきながら、現代にコミットしている作品を書かれています。

いずれの作品も図書館で貸し出し可能です。高瀬さんの本との出会いを追体験してみませんか。

講演会後にはサイン会があり、ファンとの交流も！

～ファンの声を聞きました！～

高科芽依さん　愛媛大２年
　私も西高出身なので、高瀬さんが芥川賞を受賞した時、卒業生にすごい作家さんがいるんだとびっくりしました。講演では、新居浜の自然が小説に反映されていると話していたのが印象的でした。

藤田義人さん　新居浜西高２年
　新居浜から芥川賞作家が生まれ、その人の講演が地元で聞けるのはめったにできない経験だと思います。僕も小説家になりたいので、作家になるまでのことや必要なことが聞けて良かったです。

合田美由紀さん（53）
　若い感性と新しい視点がすごい！ 芥川賞受賞までにはものすごい努力があったんだろうと思っていましたが、10 年間も下積みがあったと聞いて、続けることって大事だなと思いました。

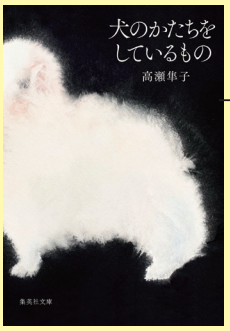
福田結子さん　愛光高２年
　作家として活躍している高瀬さんの話は、本を読む側としても面白かったです。
　聞いていると、自分も書いてみたいなという気持ちが湧いてきました。

稲見有さん（54）
　日常の人間関係や感情の機微を細やかにとらえた作品が魅力。作品の裏話が聞けるかなと思って来ました。心に残っているのは、登場人物には 100％の善人も 100％の悪人もいないという話です。

著書紹介

「おいしいごはんが食べられますように」
（講談社）

第 167 回芥川賞受賞作品。
日常の一場面に潜む職場の微妙な人間関係や心理を機敏にとらえた作品であり、仕事＋食べ物＋恋愛を通して描いた傑作。タイトルと本の装丁からは想像できない内容に、いい意味で裏切られます。



「犬のかたちをしているもの」
（集英社）

愛と生殖について切実に描いた衝撃のデビュー作。第 43 回すばる文学賞受賞。
田舎と都会、出産と未婚。女性ゆえの心の葛藤と戸惑いが映しだされた、今の時代の心の揺れを如実に描いた作品。

「いい子のあくび」
（集英社）

子どもの頃から「いい子」であるよう気を配り続けてきた主人公の直子は、その反面、割の合わなさも感じている。ところが、ある行動を起こすことによって、それぞれの思惑が明らかになっていく。

「水たまりで息をする」
（集英社）

ある日、夫が風呂に入らなくなった…。日常のどこかに沈んだ“苦しさ”のかけら。それでも人は、なんとか息をして生きていく。そんな小さな心の動きをすくい上げるように描いた物語。

祝 高瀬作品 映画化

高瀬さんが２０２３年に発表した「うるさいこの音の全部」が映画化され、２０２６年冬に公開予定です。
監督は加藤慶吾さん、脚本は本県出身の村上かのんさんが務めます。
高瀬さんは「いい作品になると思います。観てくれると嬉しいです」と、自身初の映画化に胸を躍らせていました。

映画 HP

「うるさいこの音の全部」
（文芸春秋）

小説家デビューという「変化」が、人との距離感や周囲との価値観のズレを浮き彫りにし、私小説のようなリアルさを通して、物語の虚構と現実が交錯する。芥川賞作家高瀬隼子が作家デビューの舞台裏を描く。

夢をかなえた古里の先輩として、地元の子どもたちへのメッセージをもらいました。

「みんながみんな夢を持つべきだとは思っていませんが、あった方が楽しいですよ。必ずしも職業である必要はなく、太鼓台のかき夫になりたいとか、地元に住み続けたいとか、世界一周したいとか。自分の心がときめくことを、何個か持っていると楽しいと思います。
絶対かなえなきゃと思うとしんどくなるので、諦めても、辞めても、変更してもいい。柔軟に人生をポジティブにできる目標があるといいなと思います。」